

抽象と表象像

—聖トマスにおける抽象について—

増田三彦

1. 導入

トマスは三段階の知性について語る。最も優れた神の知性、次に天使の知性、最後は最も劣る人間知性である。⁽¹⁾人間知性独特の不完全性は、それが始めは可能的認識者でしかないということである。⁽²⁾我々は生れた時何も知らないし、また特定の知識をとってみても、それはいつか或る時に始まったものなのであり、いわば我々の知識は歴史を持っている。これに対し、純粹現実態なる神が可能的認識者でないことは勿論、⁽³⁾純粹知性実体なる天使も、諸知識を順次に獲得することなく、その創造の時に、すべてのものの知をそっくり神から受けて持っているのである。⁽⁴⁾

さて、始めは「何も書かれていない書き板 *tabula rasa*」に比せられる人間知性は、後に現実的に特定のことを認識するに至る。こうした人間知性が可能知性 *intellectus possibilis* と呼ばれる。可能知性は如何にして現実態となるのか、これが問題である。我々の知性認識の始まりを説明する役割を持つ、能動知性が行なう抽象の論理について、トマスに即して見てゆく。

2. 人間知性は能力であり知的魂ではない

人間知性とは何か、トマスによると、「魂 *anima* は、我々の世界に生きている諸々のものにおける、生の第一の根源 *primum principium vitae*」である。生物は根源なる魂によって生きる。各人間にも唯一の魂があって、理性的魂 *anima rationalis* とか、知性的魂 *anima intellectiva* とか、知性的根源 *intellectivum principium* とか、精神 *mens* とか呼ばれる。⁽⁶⁾これによって人は、知性認識の外、感覚活動、栄養摂取、成長といった生の営みを行う。⁽⁷⁾魂は体との関係においては、その実体的形相である。⁽⁸⁾「知性」なる語はしばしば知性的魂の意味で用いられるが、厳密には、知性と知性的魂は区別される。⁽⁹⁾「知性は魂の或る能力 *potentia* であり、魂の本質ではない」と⁽¹⁰⁾

ある。魂が「生の第一の根源」であったに対し、能力は「魂の働きの最近接的根源 proximum principium operationis animae」と言われる⁽¹¹⁾。知性なる能力は、その基体なる魂がそれで以て quo 知性認識するところの根源である。さて知性なる能力 potentia はその知性認識のはたらきに対して、また、魂の本質 essentia はその存在 esse に対して、いずれも可能態 potentia が現実態 actus に対する仕方に関わる。然るに、現実態の側にある魂の存在と知性のはたらきとは、神以外の場合異っている。故に、可能態の側にある魂と知性とは当然異っている⁽¹²⁾。知性等の能力は、魂の本質でない以上その附帯性 accidens、魂の本質に必ず伴い来る固有性 proprietas である⁽¹³⁾。人間知性は知性的魂の能力、力であり、知性認識というはたらきへの能力である。

3. 認識と非質料性

トマスは、知性的魂及び知性の非物体性・非質料性を証明しているが⁽¹⁴⁾、何らかの仕方での非質料性こそが認識を成立させるのであり、それ故、「認識は質料性に反比例する⁽¹⁵⁾」と言われる。認識が成立するためには、認識主体と認識対象双方の非質料性が要求される。

認識が成立するには、認識主体と対象とが何らかの仕方で一一致せねばならず、その媒介 medium となるのが形象 species である。それは対象の類似像 similitudo であり、対象の形相の類似である。可能的認識者が、形象を受容することによって現実的認識者となるのである。認識されるものの形象が認識する者においてあることにより認識が成立するのだから、認識者は他のものの形相をも所有できる広さを有していなくてはならず、然るに、制限し制約する根源は質料であるから、だから認識者は何らかの意味で質料性を有していなくてはならない。

認識対象——現実的な——にも非質料性が要求される。というのも、形相が質料と共にあるとき、それは自然界に実在するに対し、形相は形象として質料から分離され、認識者の内に受容されることによって認識されるのだからである。受けとられる者は受けとる者の様態に従って受けとられる故⁽¹⁶⁾、非質料的知性（的魂）に受容される可知的形象は全く非質料的であるを要する。⁽¹⁷⁾

4. 表象像

認識能力とその対象は相応する。⁽¹⁸⁾『身体に結合している人間』の知性の固有対象は、物的質料において存在している何性 quidditas もしくは本性 natura である」とトマスは言う。⁽¹⁹⁾身体を持つこの地上の人間知性が第一に対象とするのは、やはり同じくこの世界にある物的なものの本性なのである。そして、始めは可能態においてある人間知性が真理の知を獲得するのは、人間の身体性と感覚の正当な評価を逸しないトマスによれば、⁽²⁰⁾感覚を介して行われる。

存在するものは無為ではなく、働く。物的なものはその回りに物理的・化学的な作用を及ぼす。⁽²¹⁾感覚は身体的器官の力ゆえ、⁽²²⁾物体からの作用を受動することができる。まさに「感覚とは、外部の可感的なものによって変化を与えられるように生来できているところの、一種の受動的能力」⁽²³⁾なのである。認識対象は先ず、外部感覚 sensus exterius たる五感に働きかける。そして五感を通して得られた諸情報は、「感覚のすべての把握は、共通の終極として共通感覚 sensus communis に関係づけられている」と言われる共通感覚において総合されると考えられる。⁽²⁴⁾それはさらに、他の内部諸感覚の力にもより、⁽²⁵⁾表象像 phantasma を形成する。人間知性が対面する convertere のは表象像である。物的対象は表象像として知性に差し出される。

「表象像は……可能知性に対し、ちょうど可感的なものが感覚に対し、色が視覚に対するが如くに関わる」と言われ、⁽²⁶⁾それはまた知性の対象とも言われる。⁽²⁷⁾それは、然し、可知的なものでもなければ、可感的事物の本性でないゆえに第一の対象でもない。にも拘らず、知性の対象は表象像を介して知性にもたらされるし、知性は表象像に向う convertere ことにより認識する。「人間の知性的魂は、身体との合一よりして、表象像へ傾向づけられた視界 aspectus を有している」⁽²⁸⁾と言われる。およそ現実的に知性認識する際には、必ず表象像が⁽²⁹⁾いる。これは我々が体験するところである。表象像が知性の対象ともいわれるゆえんである。

5. 抽象

人間知性、ここでは可能知性、は対象を受容することにより可能態から現実態へと移行するゆえ、受動的能力 potentia passiva である。⁽³⁰⁾人間の知性認識は受動において始まる。魂の能力はその現実態なる活動により知られ、活動はその対象により

規定される。受動的能力の対象は能力の活動に対して、能動因 *causa agens*, 運動因 *causa movens*, 根源 *principium* として関わりとされる⁽³¹⁾。可感的なものは感覚に對しかかるものである。知性の対象とも言われた表象像が、知性認識における能動者・作動者 *causa efficiens* とされてよいか。否。その理由。能動者と受動者は対比を有する。何故なら、能動者は現実態であることにより働き、受動者は能動者に対して可能態にあることにより受動する。然るに、可能態と現実態は有の同一の類を分つ。よって能動者と受動者は同一の類に属しているべきである。例えば、白いものは黒いものにより受動するのであり、甘いものによっては附帶的にしか受動しない⁽³²⁾。同じく知性は非質料的なものゆえ、質料的なものにより受動することはできぬ。物的なものが物的感覚器官に物的作用を及ぼし、表象像を生ぜしめることは不都合でない。これに反し、表象像は身体的器官の力なる表象力においてあるゆえ、それが指示する外部のもの自体の質料は持たないものの、感覚器官の質料性はまぬがれず、従って表象像が可能知性に作用してそこに可知的形象を形成し知性認識を成立せしめることはできない⁽³³⁾。つまり表象像は現実的に可知的でなく、単なる表象像は知性に対する能動者ではない。とはいえ、體驗的に明白な如く、我々は表象像に向うことにより現に知性認識しているのだから、知性の対象は表象像のほうから来る。故に、知性認識の成立に表象像が資すること、それだけでは足りぬことを認めねばならない。表象像には対象の規定がある。欠けているのは可知性である。ここに至って、トマスは能動知性を導入する。

能動知性は、可能的に可知的な表象像から可知的形象を抽出するという抽象の働きにより表象像における形象を現実的に可知的なものとする能力であり、可能知性は可知的形象を受容する能力である。この二つは能力 *potentia* ゆえ、その働き *actus* によって知られ定義される。トマスは、能動知性は措定 *ponere* されねばならぬと繰り返し述べている⁽³⁵⁾。反面彼はまた、我々は能動知性を體驗する *experimur* と語ることしばしばである⁽³⁶⁾。措定ということと體驗ということとは矛盾せず調和する。「我々は可能知性、能動知性双方の働きを我々の内に経験する⁽³⁷⁾」と言われているように、我々が體驗的に知るのは能動知性の抽象する働き *operatio* であり、他方我々が措定するのはかかる働きをなす能力 *potentia* たる能動知性である。我々は能動知性の働きを経験するゆえ、能動知性を措定する。可能態は現実態によって

の他知られないからである。⁽³⁸⁾「能動知性の光は、諸々の可知的形象を現実的に可知的にするものとして、可知的諸形象の根拠 ratio であるかぎりにおいて、それ自体において我々に知性認識される⁽³⁹⁾」と言われるのはこの意味である。可知的形象が生ずるのは能動知性の作用によるからである。なお能動知性は可感的なものではないゆえ表象力の下に入り来らず思い描くことができない。それは可知的なものであり、働きとその結果で知る外ない。

さて措定された能動知性は如何なるものか。可能的知性認識者が現実的それになるのであり、それは知性が表象像に向うことによる。ところが表象像はそれ自体可知的なものではない。にも拘らずこうして知性認識が成立するとすれば、それは知性の側に何らかの力があって表象像を可知的なものとするに違いなく、これによって可知的形象が可能知性の内に生ずることにより知性が現実化すると考える他ない。この知性の力が能動知性である。⁽⁴⁰⁾ここに、「何らかの現実態における有によらずしては、何ものも可能態から現実態に導かれはしない⁽⁴¹⁾」との基本原理の適用がある。現実的に熱いものなる火が、可能的に熱いものなる木材を、現実的に熱いものなる火に化する。人間が人間を生む。この場合勿論、作用する現実態と結果する現実態は同じ形相的特質を持っている。火と火、人間と人間といったように。さて能動知性が結果せしめるのは現実的に可知的な形象であるから、「能動知性は現実的に可知的な有である」ということになるように思われる。事実トマスは「能動知性は自己の実体に即して現実態においてある」、「可能知性は自己の実体に即して可能態においてある」と言っている。次に、能動知性は⁽⁴²⁾可[・]知[・]性[・]の現実態である。「能動知性はすべての可知的なものの現実態である」とか、「精神は現実的に可知的なものであって、このことに基づいて精神の内に能動知性が措定される⁽⁴³⁾」とか言われる如くである。しかし能動知性とか精神が現実的に可知的であるということはトマスの立場と矛盾するようにも思われる。我々の知性認識は「始め」存在しないのであったし、自己自身を知性認識するのも、自己以外の物体的なものの認識を介して始めて成立するとするのが彼の立場である。魂が可知的なら、人間は直ちに自己の魂を認識するはずであろう。⁽⁴⁴⁾実際はそうでない。

能動知性の可知性の意味が、だから問題である。能動知性が、たとえば犬を表示する表象像に作用して、犬の可知的形象を生ぜしめる。人間が人間を生み、熱が熱

を生むのであるから、ここでも能動知性が犬の可知的形象を生ずるゆえ能動知性は犬の可知的形象を有しているのか。一般的に言って、能動知性は現実的に可知的な特定の諸形象を有しているという意味で現実的に可知的なのか。勿論そうでない。「もし能動知性が自らの内にすべての可知的なものの規定を有しているのであれば、可能知性は諸々の表象像を要せず、却ってただ能動知性のみによって、すべての可知的なものの現実態に導かれることとなってしま⁽⁴⁵⁾う」のであり、人間知性の認識のため、能動知性と可能知性とだけで充分だということになってしま⁽⁴⁶⁾う。能動知性が可知的だといっても、特定の可知的な対象ではないのであって、能動知性は対象を現実的ならしめる⁽⁴⁶⁾のである。知性認識の始まりを考えると、認識内容は表象像により呈示される。既述の如くこれは体験によって明白である。従って能動知性が直接的に可能知性に向いそこに可知的形象を与えるという仕方で、能動知性が現実態、可能知性が可能態であるのではなく、両者の間に表象像を置いて考えねばならない。そうすることによってまた、同一の魂において、能動知性という、諸々の可知的なものに対して現実態においてあるものと、可能知性という、諸々の可知的なものに対し可能態においてあるものが、共存することの不可能ならぬことがわかる。こう⁽⁴⁷⁾したことを述べるところでたいていトマスは、能動、可能両知性と表象像ではなく、知性的魂もしくは精神と、表象像とを比較する。すると知性的魂と表象像の間に、二つの観点からなる二重の可能態—現実態の関係が見出される。また能動知性と可能知性はかかる関係を有する魂に基礎づけられた二つの能力なることが判明する。

(i) 魂が現実態、表象像が可能態という関係。知性的魂は既述の如く非質料性を有している。「知性的魂は、質料的諸条件から引き離された存在を持⁽⁴⁸⁾っている」のであり、それ故、『対異教徒大全』によれば、「人間知性の実体は、知性的本性を持⁽⁴⁹⁾っている。何故なら、非質料的実体はみなこうしたものなのだからである」と言われる。非質料的実体とは、魂と天使と神であろう。これらはみな知性認識をする。『真理論』の類似の箇所では、「魂の外なるものは可能的に可知的なものであるが、精神自体は、これに対し、現実的に可知的なものであり、これに基づいて精神の内⁽⁵⁰⁾に能動知性が措定される」と言われている。これを考えれば、先の「魂の持つ知性的本性」は、知性認識され得るもの、知性認識をなし得るもの、の二つの意味を持つであろう。非質料性は認識成立の根拠であり、つまり、それは認識者にとっては

認識する力の根拠であり、認識対象にとっては認識されることの根拠であるとすれば、非質料的実体である知性的魂が、知性認識する力を持つと共に、何らかの仕方でも可知的なものであると考えてよい。トマスは先に引用の『対異教徒大全』の続きで言う。「だが、このことからはまだ、魂が、この或いはあのものに限定された仕方でも類同化されているということにはならない。この類同化ということが、我々の魂がこの或いはあのものを特定の仕方でも認識するということのために要求されるのである。というのも、認識は、すべて、認識者においてある認識対象の類似像によってなされるのだからである⁽⁵¹⁾」と。ここで言う、「このことからはまだ云々」は、「特定の対象に限定されない認識を有している」ということであって、トマスはつまり、非質料的魂が可知的なもの、即ち知性認識され得るものなることを予想していることを示すであろう。もとより然し、魂において始めから可知的形象が存しているわけではない。特定の、例えば馬とか人とかの対象の可知的形象が存しているのではない故、魂は決して現実的に知性認識しない。魂は自己の可知的視界において見るが何も見えない。このかぎり、魂も能動知性も可知的ではあり得ない。しかし、より根源的で、より深い意味で知性的魂は可知的であると考える外、能動知性の働きが理解できない。知性はいわば可知的空間、可知的視界の如きもので、そこに特定の可知的形象が存しない間は認識ということは起らぬが、可知的形象が受け取られるや認識する力を、知性的魂全体が持っている。能動知性は魂のかかる性格に由来するのである。

能動知性の基体なる魂は、根源的仕方でも可知的なものであるが、表象像は、これに対し質料的制約のゆえに現実的に可知的なものでない。魂は非質料的なものゆえ、そこから由来する能動知性の働きが表象像に作用して、それを自己に似たものに、即ち非質料的なものに、従って可知的なものにする⁽⁵²⁾。かかる作用は照明 *illuminatio* と言われ、これに対応する能動知性の力が光と言われる⁽⁵³⁾。

(ii) 次は、魂が可能態、表象像が現実態という関係。知性的魂は可知的であるにせよ、特定の物的なものの本性の類似像を欠いており、未規定的なものとしてあるに対し、表象像にはそうした規定が存する。知的魂は、能動知性の力によりこうした表象像から可知的なものとして抽象された形象を受容する力を持っており、この力がまさしく可能知性に外ならぬ。かくて、表象像において対象の規定が現実的

にあるに対し、魂においてそれは可能的にある。

以上の如く、第一の観点は可知性という観点、第二の観点は特定の対象の規定という観点である。かくて、能動知性と可能知性は、始めは白紙状態 *tabula rasa* においてありながら、しかし身体から独立した非質料的存在を持つ同一の知性的魂もしくは精神を根源としてそこから由来し、そこを基体とする、二つの能力なることが判明する。これら二つは、魂と実体的に異なる二つのものではなく、実体的なものとして考えるべきものはむしろ知性的魂である。能動知性、能動知性の光、能動知性の力と呼ばれるものは、魂や可能知性と独自の实体でも、何らかの働きでもなく、知性的魂に生来そなわっている力である。同一のものが異なる働きをなす二つの力を持つことに不都合はない。なお、知性的魂が知性と呼ばれるように、可能知性の根源としての魂を可能知性、能動知性の根源としての魂を能動知性と呼ぶことができる。

だから、対象は表象像を介して可能知性に達する。だがこのことは、知性と感覚とが人間において結合しており、共同して働くことに基づいている。すなわち、能動知性は表象像を照明するが、表象像は表象力なる感覚においてある。従って、抽象は、身体と魂とよりなる人間全体の業である。知性と感覚全体の業であり、双方は相互に働きかける。「(表象像が) 照明されるとは、ちょうど感覚的部分(即ち感覚能力)が知性的部分(即ち知性的能力)への結合によってより強力なものとなるように、そのように表象像が能動知性の力によって、そこから可知的観念 *intentiones* が抽象されるに適したものとなるということである」⁽⁵⁴⁾と言われる。認識する感覚の力が、同じく認識するものの側にある知性の力により強化されるのに応じて、対象の側にある表象像も、何らかの意味で対象の側にある可知的な能動知性により、可知的なものに接近すると考えられる。認識されるものの形象は認識されるものにおいてあるのだからである。

こうして、能動知性と表象像とが人間の知性認識を成立せしめるのだから、この二つが知性認識活動を引き起す能動因、作用因である。しかし、「働きの主要性は、表象像にではなく能動知性に帰せられ」⁽⁵⁵⁾ており、能動知性が、主要的能動者 *principale agens*、第一次の能動者 *primum agens* であるに対し、表象像は道具的能動者 *agens instrumentale*、第二次の能動者 *agens secundarium*、因の素材 *materia causae*

であるとされる。⁽⁵⁶⁾それは可知性の見地からみでの優位性である。表象像は先ず能動知性の光によって始めて、可知的レベルにまで引き上げられ、それによって可能知性を形相づけることができるようになるからである。トマスによるとここに、知性はその対象を感覚から受けるにも拘らず、単に可感的性質を認識するにとどまらず、可感的なものの本質を捉えるに至る理由があるとされる。知性は表象像に向うことによって、そこに「人」とか「馬」とかの何性 *quidditas* を読みとる *intus legere* ことができる。⁽⁵⁷⁾さらに進んで、知性は、可感的なものの考察を通して、神に関する何程かの認識にまで達し得るのであって、こうしたことも、知性認識の因が感覚プラス知性であることによるとされている。⁽⁵⁸⁾

なお我々は、表象像を可知的ならしめることにより知性認識するのであり、それは知性が表象像の表現する個体的質料を捨象したから、可知的形象は個体化の条件を欠いており、知性は対象の種の普遍的側面を認識するのであって、その結果知性は普遍的観念を形成する。にも拘らず、知性認識の間表象像はとどまっておき、それは可感的かつ個的なものである。知性は表象像に向いそれと連結していること⁽⁶⁰⁾によって、立ち帰りという仕方⁽⁶¹⁾で個を促えるとされている。それが欠けるなら、知性は固有対象を、即ち質料的な個的なあり方をするものの本性を、そうしたものとして捉えていないのである。そのかぎり、知性が表象像に向うことによって行われる知性の認識は、現実的には個体の認識を含んでいる。トマスのこうした抽象論は、人間知性の視界が表象像に向っていて、そこにおいて知性認識せんとしているもの⁽⁶²⁾の本性を洞察する *inspicere* という体験的事実の説明である。

以上によってはしかし、抽象によって明らかとなる認識内容の性格は明らかでない。それを見るためには、特に『ボエチウス三位一体論註解』に詳しい概念的次元での抽象論を見なければならない。

註

- (1) *Cont. gent.*, IV, 11, *Sum. theol.*, I, q. 55, a. 2c, etc.
- (2) *Sum. theol.*, I, q. 79, a. 2c.
- (3) *ibid.*, I, q. 14.
- (4) *ibid.*, I, q. 55, a. 2c; q. 58, a. 1c, a. 3c.
- (5) *ibid.*, I, q. 75, a. 1c: “anima dicitur esse primum principium vitae in his quae

apud nos vivunt...”

- (6) *ibid.*, I, q. 78, a. 1c; *De verit.*, q. 10, a. 1c.
- (7) *ibid.*, I, q. 76, a. 3c.
- (8) *ibid.*, I, q. 76, a. 1c.
- (9) *ibid.*, I, q. 79, a. 1, ad 1: “anima intellectiva quandoque nominatur nomine intellectus...”
- (10) *ibid.*, I, q. 79, a. 1c.
- (11) *ibid.*, I, q. 78, a. 4c; cf. *De anima*, a. 12c: “potentia nihil aliud est quam principium operationis alicuius, sive sit actio sive passio. Non quidem principium quod est subiectum agens aut patiens, sed id quo agens agit aut patiens patitur...”
- (12) *Sum. theol.*, I, q. 79, a. 1c.
- (13) *ibid.*, I, q. 77, a. 1, ad 3, ad 4, ad 5; a. 6c.
- (14) *ibid.*, I, q. 75, a. 2c; *In de an.*, III, lect. 7, nn. 677-685.
- (15) *Sum. theol.*, I, q. 84, a. 2c.
- (16) 詳細には, *Sum. theol.*, I, q. 14, a. 1c, q. 84, a. 2c; *De verit.*, q. 2, a. 2c; *In de an.*, II, lect., 24, nn. 551-553.
- (17) *Sum. theol.*, I, q. 84, a. 1c.
- (18) *ibid.*, I, q. 85, a. 1c, q. 12, a. 4c.
- (19) *ibid.*, I, q. 84, a. 7c: “Intellectus autem humani, qui est coniunctus corpori, proprium obiectum est quidditas sive natura in materia corporali existens.” I, q. 85, a. 8c に, 固有対象を説明して, “id quod est primo et per se cognitum a virtute cognitiva, est proprium eius obiectum” とある。primo は directe と言いかえてよく, indirecte に対立し, per se は per accidens に対立しよう。cf. *ibid.*, I, q. 86, a. 1c.
- (20) *ibid.*, I, q. 76, a. 5c: “Anima...intellectiva...oportet quod eam (=notitiam veritatis) colligat ex rebus divisibilibus per viam sensus...unde oportuit quod anima intellectiva non solum haberet virtutem intelligendi, sed etiam virtutem sentiendi. Actio autem sensus non fit sine corporeo instrumento. Oportuit igitur animam intellectivam tali corpori uniri, quod possit esse conveniens organum sensus.
- (21) 物体は実体の形相に基く能動的な附帯の形相 forma accidentalis activa を通じて働く。 *Sum. theol.*, I, q. 77, a. 1, ad 3; *In de an.*, II, lect. 14, n. 425, lect. 15, n. 432.
- (22) *In de an.*, II, lect. 11, n. 377: “sensus est virtus in organs corporali.”

- (23) *Sum. theol.*, I, q. 78, a. 3c: “Est autem sensus quaedam potentia passiva, quae nata est immutari ab exteriori sensibili.”
- (24) *ibid.*, I, q. 78, a. 4c, ad. 2: “ad sensum communem referantur, sicut ad communem terminum, omnes apprehensiones sensum”, また, *In de an.*, III, lect. 3, nn. 609, 612, 613, lect. 12, nn. 773, 774 を見よ。
- (25) vis cogitativa, memoria, phantasia が phantasma の形成に直接関わるようである。*Cont. gent.*, II, 73, n. 1503, 1512; *In de an.*, III, lect. 5, n. 638. また, 知性が phantasmata から対象を受容するという方向とは逆に, 可能知性が自ら欲する知性活動を行うために, 適切な phantasmata を形成することができる。*Cont. gent.* II, 73, n. 1523; *Sum. theol.*, II-III, q. 173, a. 2c: “secundum imperium rationis disponuntur phantasmata in ordine ad id quod est intelligendum. Sicut enim ex diversa ordinatione earundem litterarum accipiuntur diversi intellectus, ita etiam secundum diversam dispositionem phantasmatum resultant in intellectu diversae species intelligibiles. その際, 「知性的力の幾分かを分有する……感覚能力の至高部分 supremum」(*In de an.* II, lect. 13, nn. 397, 398)と言われる vis cogitativa が, 可能知性の下で phantasmata を用意すると言われる。*Cont. gent.* II, c. 73, n. 1503, etc.
- (26) *De anima* a. 2c: “Phantasmata enim, ut dicit Philosophus in *III de anima*, se habent ad intellectum possibilem, sicut sensibilia ad sensum, et colores ad visum.”
- (27) *De anima*, a. 1, ad 11, a. 15c, ad. 3, ad. 8 etc.
- (28) *ibid.*, a. 16c: “anima intellectiva humana ex unione ad corpus habet aspectum inclinatum ad phantasmata…”
- (29) *Sum. theol.*, I, q. 84, a. 7c; etc.
- (30) *ibid.*, I, q. 79, a. 2c.
- (31) *ibid.*, I, q. 77, a. 3c; *De verit.*, q. 16, a. 1, ad 3, *In de an.*, II, lect. 6, n. 305.
- (32) *De verit.*, q. 8, a. 9c.
- (33) *ibid.*, q. 8, a. 9c; *Sum. theol.*, I, q. 84, a. 6c.
- (34) *Sum. theol.*, I, q. 84, a. 7c; q. 89, a. 1c fin.
- (35) *ibid.*, I, q. 79, a. 3c; *Cont. gent.*, II, 77, n. 1584, *De spirit. creat.*, a. 9c; *De anima*, a. 4c.
- (36) *In de an.*, III, lect. 10, n. 734, *Sum. theol.*, I, q. 79, a. 4c; *Cont. gent.* II, 76, n. 1577, *De anima*, a. 5c; *De spirit. creat.*, a. 10c.
- (37) *De anima*, a. 5c: “Utramque autem harum operationum experimur in nobis ipsis. Nam et nos intelligibilia recipimus et abstrahimus ea.”

- (38) *In metaphys.*, IX, lect. 10, n. 1894. cf. *Sum. theol.*, I, q. 87, a. 3c: “Hoc igitur est primum quod de intellectu intelligitur, scilicet ipsum eius intelligere.”
- (39) *De verit.*, q. 10, a. 8, ad 10 (2^{ae}): “lumen intellectus agentis per se ipsum a nobis intelligitur in quantum est ratio specierum intelligibilium faciens eas intelligibiles actu.”
- (40) 抽象が能動知性の「固有な働き」である。推論を通じて、未知なることがらを既知なることがらにするのも、或る意味で能動知性の働きである。*De anima*, a. 5c: “propria operatio intellectus agentis est abstrahere ea. Sic enim facit intelligibilia actu. ...Ipsa...principia comparantur ad intellectum agentem ut instrumenta quaedam, quia per ea facit alia intelligibilia actu.”
- (41) *Sum. theol.*, I, q. 79, a. 3c: “Nihil reducitur de potentia in actum, nisi per aliquod ens actu...” cf. *In metaphys.*, IX, lect. 7, n. 1848.
- (42) *De malo.*, q. 16, a. 12, ad 2: “Intellectus agens est quidam actus omnium intelligibilium, quo est omnia intelligibilia fieri...”
- (43) 註(50)。
- (44) *Sum. theol.*, I, q. 87.
- (45) *In de an.*, III, lect. 10, n. 739.
- (46) *Sum. theol.*, I, q. 77, a. 4c.
- (47) *Sum. theol.*, I, q. 79, a. 4, ad 4; *Cont. gent.*, II, 77, n. 1581; *De anima*, q. 5c; *De spirit. creat.*, a. 10, ad 4; *In de an.*, III, lect. 10, nn. 738-739; *Comp. theol.*, c. 88.
- (48) *Comp. theol.*, cap. 88: “phantasmata sunt in potentia ad aliquid quod anima intellectiva habet in actu, scilicet esse abstractum a materialibus conditionibus.”
- (49) *Cont. gent.*, II, 77, n. 1581: “Habet enim substantia animae humanae immaterialitatem, et...ex hoc habet naturam intellectualem: quia omnis substantia immaterialis est huiusmodi.”
- (50) *De verit.*, q. 10, a. 6c: “res quae sunt extra animam sunt intelligibiles in potentia, ipsa vero mens est intelligibilis in actu, et secundum hoc ponitur in anima intellectus agens...”
- (51) *Cont. gent.*, II, 77, n. 1581: “Ex hoc autem nondum habet quod assimiletur huic vel illi rei determinate, quod requiritur ad hoc quod anima nostra hanc vel illam rem determinate cognoscat: omnis enim cognitio fit secundum similitudinem cogniti in cognoscente.”
- (52) *In de an.*, III, lect. 10, n. 739.
- (53) *Sum. theol.*, I, q. 85, a. 1, ad 4.

- (54) *ibid.*, “Illuminantur quidem, quia, sicut pars sensitiva ex coniunctione ad intellectivam efficitur virtuosior, ita phantasmata ex virtute intellectus agentis redduntur habilia ut ab eis intentiones intelligibiles abstrahantur.”
- (55) *Cont. gent.* II, 77, n. 1582.
- (56) *Sum. theol.*, I, q. 84, a. 6c; *Cont. gent.* II, 77, n. 1582; *De verit.*, q. 10, a. 6, ad 7; *Quodl.*, VIII, q. 2, a. 1c.
- (57) *De verit.*, q. 1, a. 12c: “nomen intellectus sumitur ex hoc quod intima rei cognoscit: est enim intelligere quasi intus legere. Sensus enim et imaginatio sola accidentia exteriora cognoscunt; sola autem intellectus ad interiora et essentiam rei pertingit.”
- (58) *ibid.*, q. 10, a. 6, ad 2; *Sum. theol.*, I, q. 84, a. 6, ad 3.
- (59) *Sum. theol.*, I, q. 86, a. 1 etc.
- (60) *In Boethii de trinit.*, q. 6, d. 2, ad 5.
- (61) *De verit.*, q. 10, a. 5c.
- (62) *Sum. theol.*, I, q. 86, a. 1c.
- (63) *ibid.*, I, q. 84, d. 7c.